

TOPICS
2

トピックス…②

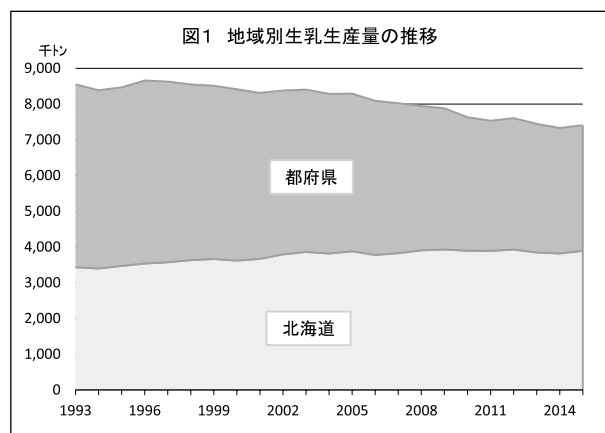
昨年6月から続く生乳生産回復のゆくえ

農林水産省「牛乳製品統計」によると、全国の生乳生産量は2015年6月に前年を上回って以降、生乳生産の回復傾向が続いている。地域別にみると、北海道の生乳生産量は14年11月以降、連続して前年を上回っており、都府県でも15年6月以降数カ月に亘り前年を上回って推移した。

わが国における生乳の生産動向は、1997年度以降概ね減少傾向で推移してきた（図1参照）。このような状況の中、生乳生産者団体では、2010年度が猛暑等の影響で生乳生産量が全国的に大きく減少したこと等から、生乳生産基盤の安定・強化を図るため、12年度からは減産を行わない中期計画生産を実施している。

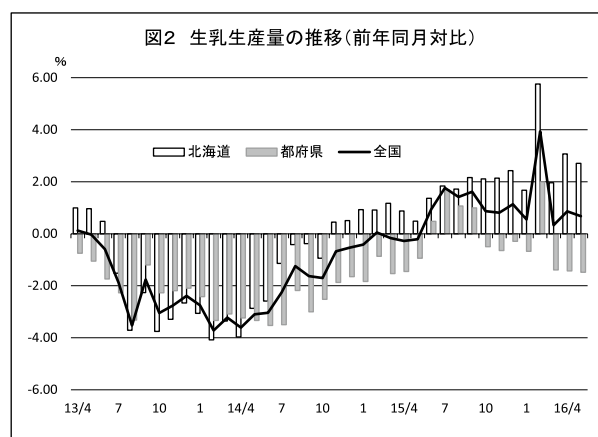
しかし、その後の推移をみると、13年度の生乳生産量は猛暑等により前年比2.1%の減少となり、14年度は前年比1.6%の減少となった。大きな減少となった13年度の生乳生産量の変化を地域別にみると、北海道が0.7%、都府県が2.4%の減少であった。続く15年度の生乳生産量は、前年比1.0%の増加となり、地域別には、北海道が2.0%の増加、都府県が0.1%の減少であった。

15年度の生乳生産量は、東日本大震災の影響で激減した反動から前年度を上回った12年度を除くと、12年ぶりの増加であった。16年度4月の生乳生産量も前年同月比0.9%の増加、続く5月も同0.7%の増加となっている。



資料：農林水産省「牛乳製品統計」

図2をみると、15年度の生産回復には、6月から9月



資料：農林水産省「牛乳製品統計」

における都府県での増産が大きく貢献していることがわかる。しかし、これは生産現場でのさまざまな努力に加えて、乳牛飼養に適した穏やかな気象条件に恵まれた結果であるとも言われている。

果たして、昨年6月から続く生乳生産の回復は本物なのか。Jミルクが公表した「平成28年度の生乳及び牛乳製品の需給見通しと当面の課題について」（平成28年5月31日）によると、本年度の生乳生産量は、表1で示したように北海道で生産の主力となる2～4歳の乳牛飼養頭数が前年を超えることから、前年度を上回るものの、都府県で前年度を3.0%下回り、その結果、全国の生乳生産量は前年度を1.0%下回る見通しである。

また、家畜改良センターの「牛の個体識別情報」によると、2歳未満の乳用雌牛頭数は14年11月以降減少傾向にあり、搾乳後継牛不足は今後も続くことが見込まれている。したがって、生乳生産は予断を許さない状況にあると言えよう。

表1 乳用種雌の年齢別飼養頭数

単位：頭

		2歳未満	2歳以上	うち2歳～4歳		計
				うち2歳～4歳	うち4歳以上	
北海道	15年4月1日	330,035	485,722	228,122	257,600	815,757
	16年4月1日	328,305	482,541	232,954	249,587	810,846
	対前年増減	▲ 1,730	▲ 3,181	4,832	▲ 8,013	▲ 4,911
都府県	15年4月1日	150,445	437,384	199,622	237,762	587,829
	16年4月1日	141,518	427,917	199,141	228,776	569,435
	対前年増減	▲ 8,927	▲ 9,467	▲ 481	▲ 8,986	▲ 18,394
全国	15年4月1日	480,480	923,106	427,744	495,362	1,403,586
	16年4月1日	469,823	910,458	432,095	478,363	1,380,281
	対前年増減	▲ 10,657	▲ 12,648	4,351	▲ 16,999	▲ 23,305

資料：家畜改良センター「牛の個体識別情報」